

和風住宅の間取りの考え方

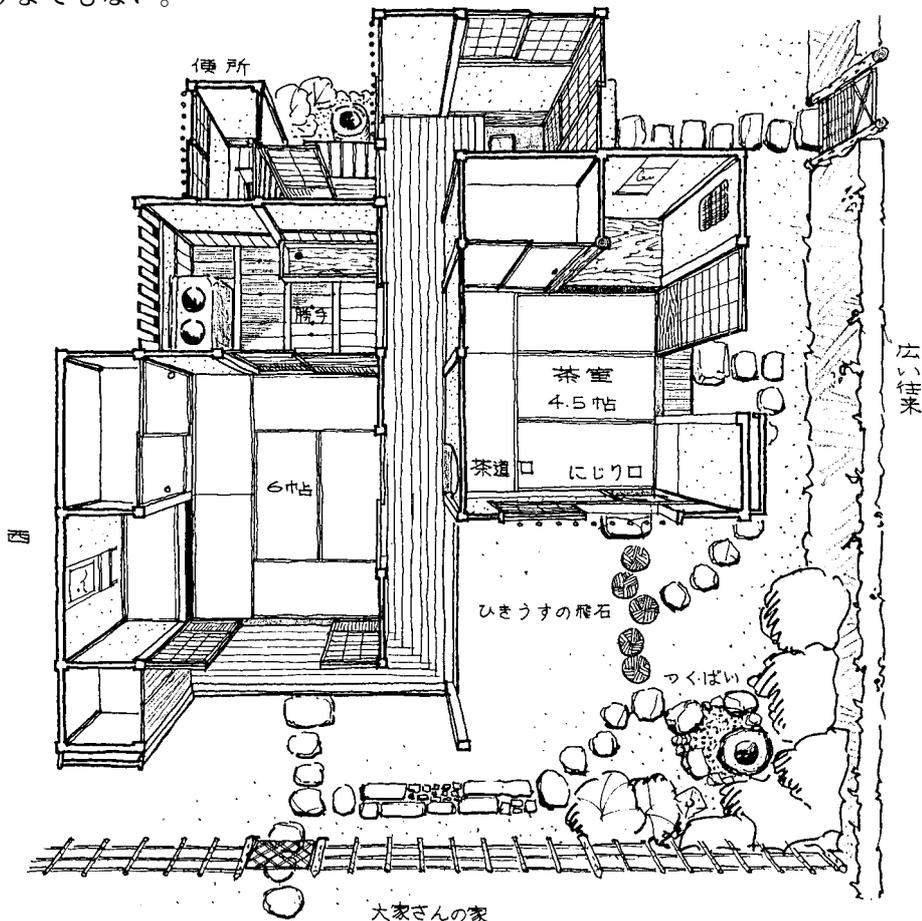
ここに掲げた図面は朝日新聞に《名作文学に見る家》と題して100回掲載した図面の中から、和風住宅の特質を表す家を取りあげてみた。日本の建築は壁が薄く、建具は紙のように薄く出来ているので、音や空気が抜けていくようになっている。そのため隣の部屋の気配が感じられたり、声が漏れたりすることもある。しかしながら、聞こえても聞こえない。聞けても聞かない。という日本人特有のマナーがある。欧米人のように、何でも厚い壁で仕切って家族のプライバシーを優先させることはしてこなかった。和風住宅に住まうと、自然環境との関りや家族の気配を感じながら生活することになるであろう。

和室の開放性と閉鎖性「青年」森 外鷗

家主の老人が隠居していた茶室のある貸家を、気に入って青年が借りた。4畳半の閉鎖的な茶室と、6畳の開放的な対比がきわだっている。

民家の「^{ねや}寝屋」や小間の茶室に見る閉鎖性と、庭に広縁を通した開放性はいずれも日本建築の持つ二面性である。

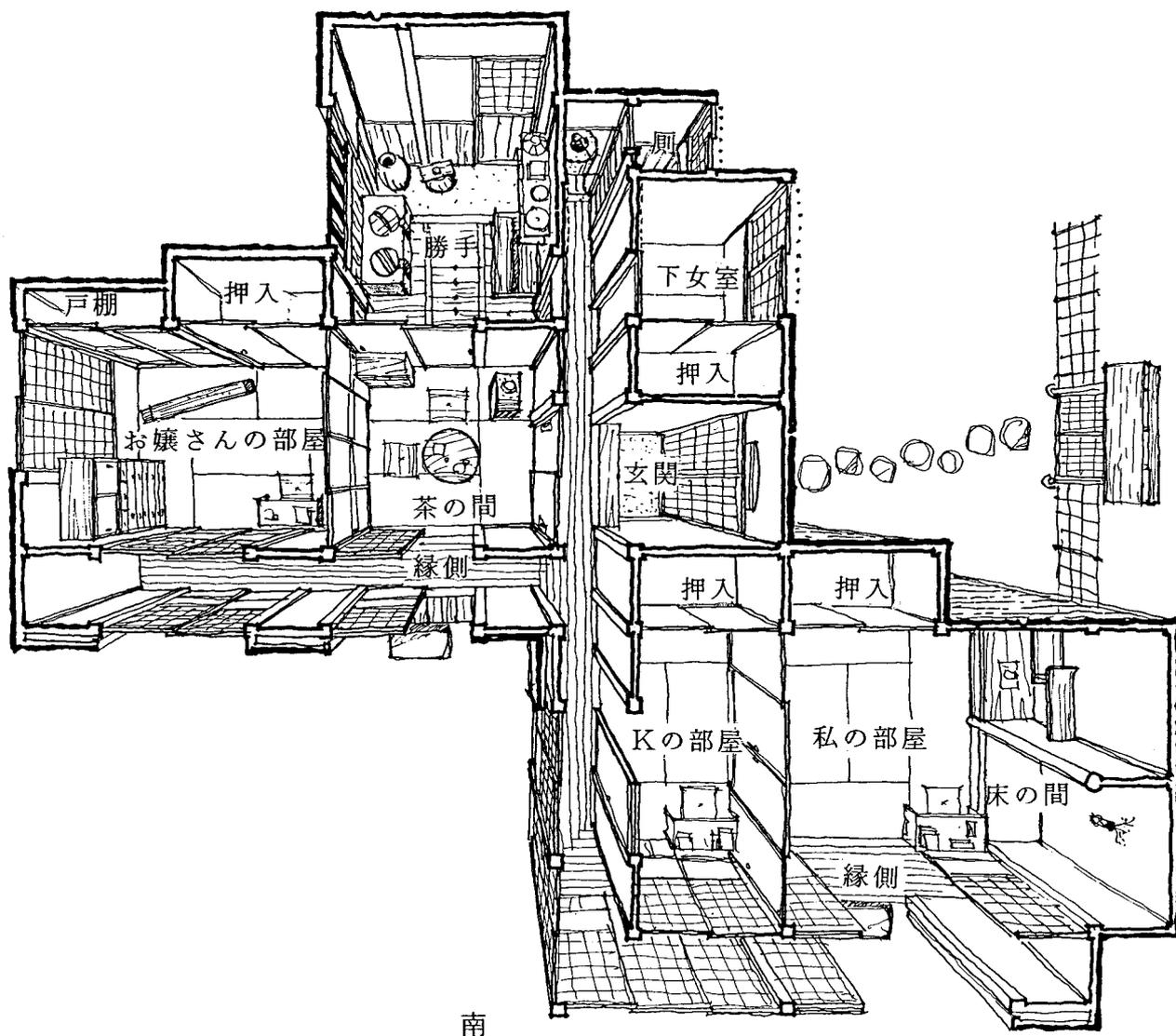
ただし、閉鎖的とは言っても西洋の石造りなどの閉鎖性とはまったく異なるものである事は言うまでもない。



気配を感じる家「こころ」夏目漱石

最近の個室は大壁洋室に鍵付きのドアが多い。プライバシーの尊重という名のもとに、お互いの部屋は独立し、家族の気配はだんだん感じられなくなって来た。

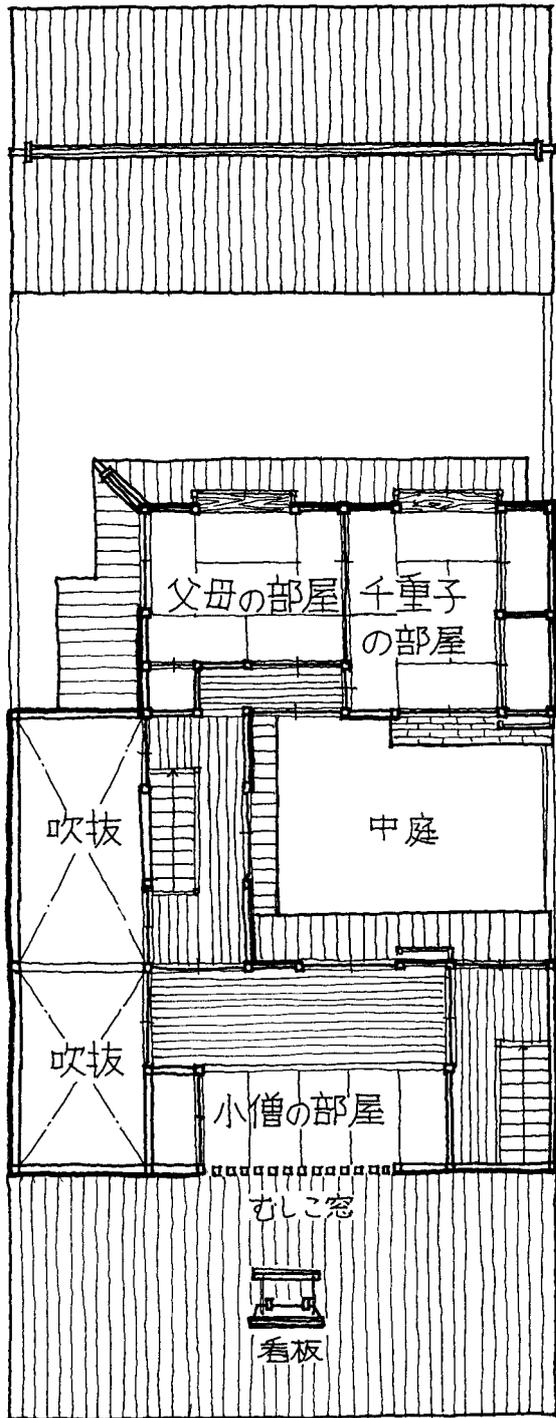
友人のKと私とお嬢さんの3人の微妙な恋愛関係が、隣の部屋を分つ襖や廊下の障子をどうしてかすかに伝わってくる。まるで息づかいばかりでなく、こころの中まで感じられる。



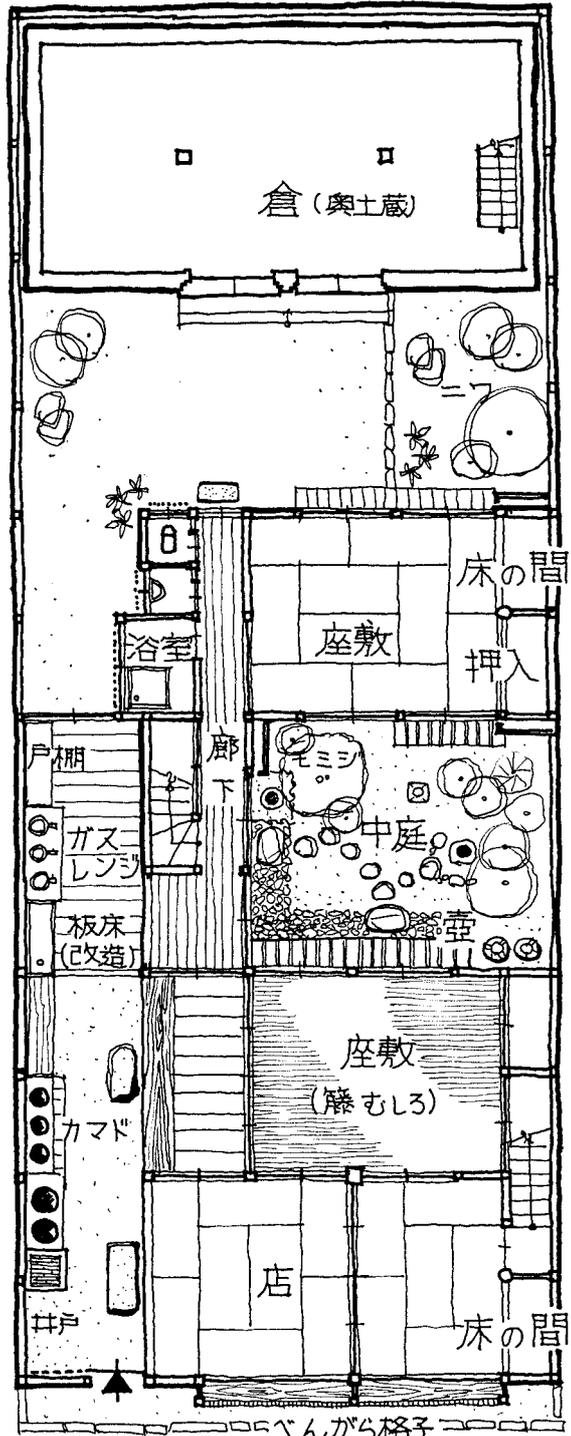
京の町屋「古都」川端康成

京都の典型的な町屋のプランである。玄関から通り庭が奥まで貫かれ、土間や台所になっている。この家の場合台所が板床に変えられている。また奥深い台所の上部は吹き抜けとなって、引き窓より明りがこぼれている。間口の狭いのは、かつて間口の広さによって課税額を算出した「じくちせん地口銭」——間口税のため、奥に深く中庭のあるプランが発展したのである。

一階のベンガラ格子や二階のむしこ窓など、民家に風情を与えるものである。



二階



一階

田の字型平面 (2) 「吾輩は猫である」 夏目漱石

この吾輩の家は一見田の字型 に見えないが、座敷部分は田の字になっており原形が見える。田の字の座敷に台所や書斎が付け足されているだけである。田の字には必ず縁側が付いている。少し大きくなると縁側の反対側に廊下がある。この家は田の字プランの発展型である。便所の突き出している所は汲み取り便所時代の産物である。

